

日本遺産認定を祝う

5月20日、東京国立博物館平成館で日本遺産認定証交付式が行われ、山岸市長が出席しました。また、同日、まほろばには関係者や地元住民らが集まり、日本遺産認定の報告を受けたのち、平泉寺小学校の児童がくす玉を割って認定を祝いました。



写真左から山岸市長、杉本知事、田口福井市東京事務所長



くす玉割りで認定を祝う

ストーリーに含まれる主な資産



- ①白山平泉寺周辺
- ②七里壁・旧勝山城下の街並み景観
- ③九頭竜川
- ④安波賀街道
- ⑤一乗谷地区
- ⑥福井城址、養浩館庭園周辺
- ⑦足羽山・九十九橋周辺
- ⑧大安禅寺周辺

ストーリーの全文などはこちら



今後の取り組み

県・福井市と連携して地域の魅力を国内外に発信するための取り組みを進めます。特に、平泉寺、勝山城下町、一乗谷、福井城下町の関係のほか、平泉寺と一乗谷を最短距離で結んだ、安波賀街道をはじめとする交通路にも注目して、「石づくりのまち」をキーワードとした調査研究を行います。

また、日本遺産がテーマのシンポジウムなどを行い、地域間の交流を進め、効果的な魅力の伝え方を模索します。
 生涯学習・スポーツ課 文化財保護室(教育会館2階)
 ☎88・8113

祝 日本遺産認定

新たに生まれた歴史ストーリー

県・福井市・勝山市が共同で申請していた「400年の歴史の扉を開ける旅」右から読み解く中世・近世のまちづくり「越前・福井」と題したストーリーが日本遺産に認定されました。県内では4件目です。

に生まれた、大量の石を用いて計画的に作られた都市が残る越前・福井の、石との共生の歴史や屈指の石づくり文化を紹介するもので、勝山市からは白山平泉寺周辺と旧勝山城下の街並み景観などが組み込まれています。

日本遺産とは
文化庁が行う事業で、地域の歴史的魅力や特色を通じて文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として認定し、魅力ある有形・無形の様々な文化財群を総合的に活用する取り組みを支援するものです。

ストーリーの紹介

ここでは、構成されたストーリーのうち、勝山市に関する部分を抜粋して紹介します。

石づくりの中世宗教都市

一乗谷から美濃街道をさらに東へ進み、分岐して九頭竜川を越えると、白山連峰の麓に勝山盆地が広がります。かつてこの地は白山信仰の拠点として発展し、戦国期に最盛期を迎えた白山平泉寺が支配しました。当時、白山平泉寺周辺には我が国最大級の宗教都市が形成され、最盛期には48社、36堂、そして6000もの僧坊があったとされます。中世の巨大寺院は宗教権力として自己を防衛するため

に城を築きましたが、朝倉氏から自立した支配権を保証された白山平泉寺も多く、戦うを有し、一向一揆などと戦う朝倉氏に強大な軍勢力で味方しました。山の谷間に約1kmも連なる樹齢300年を超える杉木立の菩提林の参道の石畳は、九頭竜川や女神川の川原石を手渡しで運んでつくられたと伝えられています。一

面が苔に覆われた、神秘的で幻想的な境内の礎石からは、当時、正面が80mにも及ぶ大拝殿があったことがわかります。山から切り出した石で築いたとされる本社の巨石の石垣は高さ3m、長さ110m以上にわたる、巨大な壁となつて人々を圧倒します。坊院跡には国内最大規模の石畳道が縦横に張り巡らされ、石組みの側溝が残るなど、計画的に町並みが整備されていたことに驚かされます。周辺の集落には、坊院跡の石垣を現在も当時のままの状態で見守っている屋敷もあります。荘厳にして静寂な神域へと私たちを誘う白山平泉寺一帯に広がる石は、かつて巨大な宗教都市が確かに存在したことを思い起こさせます。

戦国期、武家はこのように中世寺院が有していた石積みや石を割る技術をまちづくりなどに導入したと考えられ、一乗谷のまちづくりも、阿波賀街道を通じて、白山平泉寺から非常に強い影響を受けたとされています。

近世城下町のまちづくりと石

勝山市では、中心市街地を

この地では、大地が奏でる時の流れの音を感じながら、風情のある城下町の面影を偲ぶことができるのです。



城下町の面影が残る街並み



七里壁

石に現れた日本人の美と信仰
 福井を訪れると、石が季節と織りなす美しい光景に毎年出会うことができます。春、残雪輝く奥越前の山並みを背に咲き乱れる九頭竜川の弁天桜。夏、杉木立に差し込む光に優しく包まれた平泉寺白山神社の苔の絨毯。秋、澄み切った朝の日差しを受けて水面に浮かぶ一乗谷の池泉庭園の散紅葉。冬、水墨画のような雪景色の中、新しい春を待ち焦がれる養浩館庭園の梅の蕾。
 越前・福井では、石が悠久の時を刻み続ける歴史の物語を私たちに届けてくれるのです。